

ジェラルド・ジュネット著

『物語のディスクール』（花輪光・和泉涼一訳、書肆 風の薔薇 発行、1983年）

坂本麻衣子

本書は、『G.Genette, Discours du récit dans figures III, Seuil, 1972』の邦訳版である。元々は論文集『フィギュール』第三巻に収められていたものであるが、邦訳版では単行本として出版されている。

本書は、「物語論」(Narratologie, ナラトロジー)を用いた文学言説研究である。「物語論」とは物語を語る際に選択される表現形式、すなわちテキストについての理論であり、言語学をモデルにしている。物語論において「物語」とは、現実、あるいは虚構の出来事や状況を再現(représentation, しかしジュネットは、言語による出来事や状況の完全な再現の不可能性を認めており、後の『新・物語のディスクール』(1985)では「報告(rapporte)」という言葉を好んで用いている)する言説を指す。一口に物語といえども、さまざまなテキストを用い得る。例えば、小説、演劇、漫画、映画などである。ジュネットの場合はテキストの適用範囲を小説、すなわち虚構の書記物語言説に限定している。

ジュネットによれば、「物語」は三つのクラスに分類される。物語内容(histoire, イストワール, 以下内容)、物語言説(récit, レシ, 以下レシ)、そして語りの行為(narration, ナラシオン)である。内容は語られた出来事の総体、それが生起させる世界であり、物語のシニフィエである。レシはテキストそのもの、すなわち物質的実体、物語のシニフィアンである。内容を実際に現実化したものであるレシは、もちろん内容とまったく同一なわけではない。例えば内容の世界を支配する時間と論理がまったく同じ形でレシに現れる事はない。何故なら、そこには語る行為が介入してくるからである。従ってレシは内容と全く異なる時間と論理を持つことになる。しかしレシと内容の差異をもたらす語りの行為の重要性は長い間無視されてきた。ジュネット以前には、ロシア・フォルマリズムから受け継いだファーブラ/シュジェート(内容/レシ)の区別しかなく、レシと語りの行為は混同される傾向にあった。ジュネットは、これら三つのクラスの諸関係を探り、語りの行為によって生じるずれを指摘する事によって、ブルーストのテキストの個性、面白さを引き出す事に成功している。

ジュネットのモデルは、クラス間の関係について探る前に、まず三つのカテゴリーを設定している。そのモデルはT.トドロフが1966年に『文学的レシのカテゴリー』で範疇化した三つのカテゴリー、時間・相・叙法に修正、改良を施したもので、時間・叙法・態として提示される。

時間のカテゴリーでは、内容とレシの諸関係を扱う。下位カテゴリーとして、物語の時間的秩序を示す順序、レシの律動効果(リズム)を示す持続、内容における任意の出来事のレシにおける登場回数を示す頻度を持つ。叙法のカテゴリーでは、物語の再現(報告)の諸様態および内容についての語り手の情報提供の程度を扱う。ここでも内容とレシの諸関係を扱う。下位

カテゴリーとして情報提供の量的な変調を示す距離、質的な変調を示すパースペクティブを持つ。態のカテゴリーにおいては、語りの行為と、内容、レシのそれぞれの関係を扱う（ジュネットの体系には他にも夥しい数の分析述語が存在する）。

ジュネットは自らのモデルを用い、理論のフィルターを通して『失われた時を求めて』の特徴をいくつか特定している。とりわけ、時間のカテゴリーにおける貢献は大きく、当該テキストが伝統的レシとは全く違う時間性を持つことを明らかにした。順序においては、錯時法の多用による内容におけるあらゆる時間のレシへの挿入、持続においては、情景法と省略法の交替により生じる物語のリズムの歪曲、頻度においては括復法による複数の出来事の時間的圧縮…。時間の全てのカテゴリーにおいて『失われた時を求めて』は規範のモデルから逸脱し、それを变形させているのである。ジュネットによれば、当該テキストに見られる伝統的レシの時間性からのあらゆる逸脱は、プルーストの主人公マルセルの矛盾した意図から生じる。すなわち主人公、およびそのテキストが求めているのは「超時間的なもの」と「純粹状態の時間」（P.183）の両者であり、この曖昧な、矛盾した意図が逸脱の形を取って表れている。まさに、『失われた時を求めて』は「時間を相手にして行っている恐るべき戯れ」なのである。

『物語のディスクール』は、しかし単なる理論書ではない。前書きにおいてジュネットは、本書が全くの理論書でも、全くの文学批評の書でもない事を明言し、本書の両義的性格について言及している。ジュネットは、『失われた時を求めて』の持つ他の何ものにも還元不可能な特殊性は尊重すべきであり、むやみに理論の枠にはめ込むべきではないが、しかしテキストの特殊性から普遍的なものを抽出できるのもまた事実であり、その時には期せずして批評は理論に従属する事になるだろう、と述べている。

従って『物語のディスクール』は、一般理論の探求と批評の、通常は相容れない筈であるものの両立の上に成立している。一般的・抽象的法則をレシから導き出そうとする理論（ジュネットは新しい詩学【ポエティック】と呼んでいる）と、プルーストの個性を引き出そうとする批評【クリティック】の二項対立は、ジュネットにかかればたちまち融合し、豊かな調和をもたらすのである。

さて、前にも少し触れたが、本書には続編がある。『物語の詩学—新・物語のディスクール』（1985）である。フランス文学の中でも比類のない研究対象の特殊さゆえだろうか、『物語のディスクール』は時間のカテゴリーに比重をかけすぎた嫌いがあり、量的にもその半分程度が充てられている。このような叙法、態のカテゴリーの軽視に対して寄せられた意見、反論に答え、問題点を再考し、補う目的で十年余りの歳月をおいて出版されたのが『物語の詩学—新・物語のディスクール』である。先行書では手薄だった叙法、態のカテゴリーの問題が詳細に検討されているので興味のある方はぜひ一読願いたい。

最後に、フランスにおける「物語論」の系譜について簡単に説明しておきたい。「物語論」の発展は、ロシア・フォルマリズムから多くの影響を受け、1960年代に隆盛を極めた構造主義の流れとほぼ一致する。フランスにおける物語研究は、ロシア・フォルマリズムの一人であるW.プロップが著した物語言説（民話）の構造的分析の最初の成果である『民話の形態学』（1928）が、C.レヴィ=ストロースによって1960年代にフランスに紹介された時点から始まる。

レヴィ＝ストロース自身、『神話の構造』（1955）においてすでに民話を通して物語言説の分析概念（神話素）を提供している。次いで60年代においては、R.バルトが物語分析（小説）の為の仮説的記述モデルを提示し、『物語の構造分析序説』（1966）ブレモン、グレマス、T.トドロフらが相次いで言語学の変形、拡大して物語の一般理論の抽出に努めた。しかし彼らは、構造的、形式的手法を取るとはいえ、その研究対象は物語の内容面に限定され、分析は専ら、作中人物の機能を（プロップ、ブレモン）、或いは人物の行為を類型化しそのモデルを作成する事に（グレマス）捧げられてきた。ジュネットに大きな影響を与えたバルト、トドロフの分析モデルも、その厳密な適用は内容のクラスにとどまり、物語言説、およびテキスト全体について十分な検討は為されなかった。ジュネットにおいては、研究対象はテキスト全体、即ち、レシ、内容、語りの行為の諸関係である。

故に、ジュネットはフランスにおける自らの「物語論」の個別性を本書において声高に主張している。ジュネットは、物語内容を研究対象とするものを「テーマ論的物語分析」と呼び、自らの形式的分析と区別する。フランスだけでなく、物語研究のより大きな潮流において捉えるなら、ジュネットの方法論はむしろ20世紀初頭の英米批評学派を代表するH.ジェイムス、P.ラボック、E.M.フォスターから、大著『フィクションの修辞学』（1961）を著したW.ブースに至るアングロ・サクソン系、そしてF.シュタンツェル、K.ハンブルガー等ゲルマン系の研究者等のパースペクティブとそう遠くなく、彼等に多くを負っている事が分かる。『フィギュールⅢ』（1987、花輪光監修、書肆 風の薔薇発行）に収められた大浦氏とのインタビュー（1985年9月10日、パリにて）において自らを輸出入業者と命名しているのも頷けるが、実際にジュネットの理論はフランス国外においてより尊重され、とりわけアメリカの物語論者C.チャットマン、G.プリンス等に多くの影響と啓示を与えている。

「物語論」にもしかし問題がないわけではない。ジュネットをはじめとする物語論者たちが個々の理論モデルの厳密化を推し進めた結果、物語論者たちの中で、分析概念と述語の普遍的な了解が困難になってきた事である。しかし普遍的な了解に向けて、ターミノロジーの再点検は常に行われている（最近ではC.チャットマンが『小説と映画の修辞学』（1990）においてその試みを成し遂げている）。物語論は今だ発展途上の段階にあるが、これからも絶えず活性化し生成していこうと思われる。